

奇跡の地蔵に「覆堂」

さやとう

見発もされる流津波 沼仙気

東日本大震災で津波の被害にあった宮城県気仙沼市の鹿折地区で、地域に親しまれてきた地蔵を安置する「覆堂」が、京都の仏教者らの協力で再建された。地蔵は津波で流された後、がれきの中から奇跡的に見つかった。地蔵の寺として知られる壬生寺（京都市中京区）の僧侶らが7月24日、現地を訪れ、落慶法要を営む。

（小野木康雄、写真も）

地元で「石橋のお地蔵さん」と呼ばれる石橋延命地蔵菩薩像。伊達政宗に滅ぼされた武将一族の供養か、経典を忘れてきたことを悔いて自害した修行僧の慰霊のために建立されたと伝わる。約400年前から気仙沼湾の近くでまつられ、毎年8月の地蔵盆にはさまざまな祭りも行われていた。だがあの日、地蔵は津波



一時は津波に流された「石橋のお地蔵さん」の前で、復興への思いを語る菅原文子さん
―宮城県気仙沼市の鹿折地区

へ法要で現地 協力など壬生寺

にのまれ「覆堂」もろとも流失。付近は倒壊して流されてきた重油タンクの油が引火し、海上火災にも見舞われた。

約2週間後、地蔵は約50センチ先で、がれきに埋もれていたところを偶然見つかった。当時はフライラインさえ整っていなかったが、住民らは重機を使って元の場所に戻した。以来、野ざらしのまま鹿折地区を見守ってきたという。

鹿折地区では更地になった低い土地をかさ上げする工事が急ピッチで進んでいるが、復興の全貌が見えるのは数年先とみられている。かつて地蔵を世話していた住民からは物故者や地元を離れた人が出た。

「お地蔵さんがいち早く復興すれば、町の希望になる」。覆堂の再建に奔走したのは、地元で酒店を営む菅原文子さん（66）。夫と夫の両親を津波で亡くした。関西の仏教者らが宗派を超えて集う「仏教クラブ」（京都市下京区）に招かれ、平成24年から京都で被災体験を語ってきた。その活動で縁ができた仏教クラブ

と、松浦俊海会長（80）が責を務める壬生寺が建設費の一部を寄付してくれた。菅原さんも地元で協力者を募り、木造瓦葺きの覆堂（高さ4メートル、幅2メートル、奥行1・3メートル）が今春、完成。壬生寺から寄進された仏具や扁額も飾られた。菅原さんは「どうにもならない現実はあるが、お地蔵さんは地域の心のよりどころ。復興への歩みとともに、私たちも少しずつ強くなれるはず」と話す。壬生寺は、本尊のほかに石仏約3千体をまつる地蔵の寺。落慶法要を営む松浦会長は「お地蔵さまは庶民の救いとなってきた歴史がある。震災犠牲者の冥福を祈るとともに、未永くおまつりください」と思いを語った。